

【情報提供】上海葵井商務諮詢有限公司

上海市華山路301号 静安商樓211室 TEL: 021-6248-8007

URL: <http://www.aoi-bc.com/> e-mail: shanghai@aoi-bc.com

【編集/提供】葵ビジネスコンサルティンググループ 東京本部 横田税務会計事務所

〒143-0022 東京都大田区東馬込1-12-12

TEL: 03-3775-1220 FAX: 03-3775-1156

URL: <http://www.ykss.com> e-mail: info@ykss.com

【上海事情】

中国人自身が中国製品: 「Made in China」をどのように感じ、思っているのかを上海での体験談からお話します。

この商品は海外製です(香港製か、韓国製かは言わない) 「Not Made in China」と言って商品販売時に強く勧められ、値引き金額も少なかったのは、液晶TVや椅子を購入する時でした。タイ航空のボールペンを持っていたら、「ぜひ交換してください」と中国製ボールペンと換えられてしまったのは、日本料理店の店員とでした。

日本でも現在販売している低価格商品や中価格商品のほとんどが「Made in China」だと思われる。それなのに「Made in China」が、なぜ品質が低い、壊れやすいと判断されてしまうのかと考えて見ました。

その原因は検品・品質検査に対する企業文化や意識の違いでしょう。例えば、不良品が「5%」の場合ですと、一般的に日系企業では、更に「0%」に近づけるために努力を重ねますが、中国系企業ならば「素晴らしい」と賞賛して満足してしまう傾向があります。品質管理が甘いために、製品や商品が直ぐ壊れてしまっても、壊れても交換すれば良いとの感覚があり、また検品費用も抑える傾向があるので、どうしても品質管理のレベルが高くなりません。

上海葵井は、日本人は今のところ1人で中国人(上海人)を中心とした外資系企業ですが、今後も日系企業的な体質を維持して行くつもりです。「報告・連絡・相談」制度や「社内長期育成制度」等を活用したいと考えています。しかし日本企業のマイナス点である「意思決定の遅さ」や上海には短期赴任だと考えて、改良や改革を怠る「腰掛」的な経営に対しては拒絶反応を持っています。やはり上海では、全てが速く動くために中国系企業だけでなく、欧米系、アジア系企業に対しても対等に競争や取引するには国際的な感覚が必要だと思っています。つまり日本企業は意思決定が遅いと認識して、意思の決定を出来るだけ早くすることです。

中国に赴任する「日本人」幹部社員に求められているポイントは

意思の決定を速く出来る社員
長期的な思考で考えられる社員
(自分の駐在終了後までも考えている人です)

日本の本社への上海葵井の要望は「上海駐在に関しては、中国語よりも経営分析 = 会計教育が重

要」ということです。上海人の中国語は大変に訛っていますし、若い上海人の多くは日本人以上に上手い英語を話せます。

次に、中国古代の春秋・戦国時代から多数の題材を採っている小説家：宮城谷昌光著「子産」は約2,500年前の春秋・戦国時代のエピソードで「信頼・徳礼・品格」等の大切さを唱え、もし国家や一族が信頼や徳礼等を失うと、衰退して、滅びてしまうと訴えているようです。

これらの「信頼・徳礼・品格」をビジネスルールとか、ビジネス常識と意識すると、21世紀の中国ビジネスの状況が見えてきます。群雄が割拠して、覇権を争い、儲けのためならば、金のためならば、友を裏切り、信を無くし、袖の下を使ってでも勝つ事だけを求めるならば、その企業は必ずや衰退してゆきます。

現在の中国ビジネスでの常識と対策とは、？

- 口約束はリップサービスであり「**順守されない**」で破られます。
：品質・納期・金額 等に対するペナルティー条項を契約書に入れる。それでも守らないで、逃げる人も多い。：故に、口約束を守っている人は信用されています
- 中国では騙す人よりも、「**騙される人**」が悪い：最近国際ルールのようなようです。
- 中国の本質は「**反日**」です
：西安の暴動やサッカーの騒動で見れば判るとおり、日本人や日系企業に対して、少くくらい過剰に反応しても許されているようです、これが韓国系・アジア系・欧米系への反応では許されません！

どこまで変わるのでしょうか？

中国の大学での MBA 教育では「法令順守」の授業が、必修科目だそうです。理由は必修科目から外して、選択科目にすると中国人生徒が誰も受講しない傾向があるために、03年度から急遽変更したそうです。大変に納得の行く学校側の対応です。

今では日本製品も、高価格、高品質の代名詞になっていますが、昭和30～40年代までは低価格・低品質だと思われていました。そこで中国の未来を考えるに「子産」が考えたように「信頼・徳礼・品格」が生き残るのか、それとも「勝てば官軍」になるのか、判定が出るまでにはもう少し時間が掛かりそうです。

鈴木 文人記